

近代日本における仏教批判と仏教側の対応

—— 松村介石と本多日生の論争に着目して ——⁽¹⁾

ブレニナ・ユリア

はじめに

明治期に入っても続けられてきたキリシタン禁制であったが、1873年の「キリシタン禁制の高札の撤去」で実質的に解禁されると、キリスト教各派は布教活動を本格化させ、各地で教会や学校が設立していく。こういった中で、知識階級に属する日本人の入信者が続々と現われ、仏教を迷信に彩られた前近代的なものとして批判することになるが、仏教側でもそれに抗する形で論陣が張られたことで、宗教論争というものが起こってくる。

本稿では、こういった宗教論争の性格づけを明らかにするために、キリスト者として信仰の道に入った松村介石（1859-1939）と日蓮仏教者であった本多日生（1867-1931）の間で起こった論争に着目し、その特徴について考察していきたい。

今でこそあまり知られてはいないが、介石は明治後期から昭和初期にかけて、日本のキリスト教界で指導的な地位にあった人物である。内村鑑三（1861-1930）、植村正久（1858-1925）そして松村介石を「三村」⁽²⁾と称されることもしばしばであった。

介石が目指したものは日本的なキリスト教、すなわち一種の新宗教の構築⁽³⁾であり、キリスト教信者の共同体は彼と次第に距離を置くようになっていったのも事実であるが、近代日本の道德教育の分野においても広く尊

敬を集めたプロテスタント系の宗教家で、演説家としても人気が高く、講演や著述活動を通して、他の新宗教運動の創始者たちにも影響を及ぼしている。そして、彼の仏教を含む諸宗教の批判は当時の知識人や宗教家に注目され、活発な論争を生み出すこととなる。

一方、介石の批判への反論者の一人であった日生は、田中智学（1861-1939）とともに「日蓮主義」⁽⁴⁾の提唱者として知られる人物で、近代日蓮仏教を語る際には欠くことができない宗教家であるが、彼もまた戦後の日本では忘れ去られた存在になっていく⁽⁵⁾。

個人的な親交を持っていた介石と日生⁽⁶⁾の論争は1929年8月27日から10月15日まで読売新聞⁽⁷⁾の宗教欄に記載された介石による「諸教の批判」⁽⁸⁾という連載から始まる。その連載で彼が批判したのは、仏教だけでなく、正統派のキリスト教や神道、新宗教などにも及んだ。そして、仏教側の反論者として本多日生が出て、36頁にわたる反論を「信仰の根拠」と題し、彼が組織した「統一団」の機関誌、『統一』（416号、1929年）誌上に掲載される。さらに、日生の反論に対する松村の応答がその書『諸教の批判』のなかに収められている。

ここでは、本題に入る前に、まず本稿で取り上げる両者の生涯と本論に関連のある主な思想について触れておきたい。

松村介石の生涯と思想について

プロテスタント宣教師が初めて来日した1859年に、松村介石は明石藩士の家に生まれた。漢学者であった父から儒学を学び、その父の薦めで学問を志すために、12歳で上京し漢学の塾でさらに儒学の勉強に励んだ。しかし、16歳のときには、近代化に必要とされた洋学を学ぶために、官立の大阪英語学校に入り、英語を習い始める。その後、介石は神戸に移りしばらく宣教師のもとで英語を学び、キリスト教に出会う。そして、19

歳になったころ、アメリカ人宣教師ジョン・バラの指導していた横浜のヘボン塾へ入学した。

英語を学ぶかたわらキリスト教の教えにも関心を寄せていた介石は、神の啓示を受け、やがて受洗する。しばらくのあいだ、宣教師の助手として翻訳や伝導を行い、小学校教員をつとめたが、責務に耐えられず、神経衰弱の診断を受ける。これを受けて箱根の山中村で療養し快復したあと、聖職につくべく1880年に東京一致神学校へ入学するが、まもなく教師と学生の質の低さに失望し退学することになる。

西日本に拠点を移した介石は岡山の高梁教会の牧師をつとめ、大阪のキリスト教新聞『福音新報』の主筆として働いた。ちょうどそのころ、ダーウィンの『種の起源』(1859)を読み、それまでのキリスト教信仰を根底から揺さぶられることになる。そのときの煩悶について、霊的な自叙伝である『信仰五十年』で介石自身、次のように述べている。

大抵の学術の主張には驚かなかったが、ダーウィンの進化論の出た時には、実に非常に驚かされた。其れは此の説が事実ならば、基督教を始め、佛教も、儒教も、神道も、皆悉く其根柢より破壊せらるるものとなるからである。凡そ総ての宗教は、其の根本に聖人とか、神の子とか、佛とか、預言者とかと稱お祖師様を持っている。故に必ず其範を古代に取って居る。然るに今此の進化論に従へば、人間は知識に於ても、段々と進化向上して来たもので其の古代に遡ると云ふと、つまり獸類同様になって仕舞ふのである。(中略)ダーウィンの書を読み、其所説と、其の挙ぐるところの証拠の確固たるものあるを見るや、実に茫然自失して、殆んど為すところを知らなかったほどであったのである⁽⁹⁾。

進化論を知り、衝撃を受けた介石は、自らが信仰するキリスト教をもとより、諸宗教に対して大きな疑問を抱くようになる。

そして、介石は、孔子でもイエスでも釈迦でも皆偉人であるが、知識も学問も開けない何千年の昔に、地球の片隅に生まれたものであり、その偉人たちの見聞きしたことは、中国の一部、インドの一部、アジアの一部のみであるとして、これまでそれぞれの教派・宗派が争ってきたが、学問と知識が開け、交通が発達した今日は、あらゆる聖賢たちを一望の下に収め、勉強することができるようになったと考える。

そこで、介石は、宗教の革命をおこすべく、「日本教会」という宗教団体を創り、「信神、修徳、愛隣、永生」⁽¹⁰⁾を綱領とし、どの宗派にも属さない独立独歩の教会として活動を始める。1909年にはその機関誌『道』を創刊する。当初の「日本教会」は、洗礼も行い、聖書を読み、賛美歌も歌うなど、キリスト教色が強かった宗教団体であったが、次第にその色を弱め、儒教思想に基づき、キリスト教を超えた神の存在を説く宗教団体となっていくとされる。いわば、キリストなしのキリスト教、あるいは、儒教的キリスト教ともいべき新しい宗教を生み出していくのである⁽¹¹⁾。

1912年には名も「道会」に改称、その勢力を急速に拡大させ、1914年から1915年にかけて、欧米の宗教界、教育界の視察⁽¹²⁾を行った介石は、帰国後東京渋谷に「拜天堂」を建立し、「道会」の本部とした。だが、短期間で多額の寄付を集めたことなどから、次第に介石に対する不信感が募り、「道会」の活動が縮小していったと言われている⁽¹³⁾。その後は自ら率先して辻説法を行うなど伝導活動を続けていくが、1936年には肺炎をおこし療養生活に入り、1939年11月29日に81歳で死去する。

七五

本多日生の生涯と思想

一方、松村介石の批判に対応した本多日生とはいかなる人物だったのか。

日生は、明治・大正期の顕本法華宗（妙満寺派）の管長であるとともに、当時の日蓮宗門を代表する僧侶である。「日蓮主義」の伝道と社会教化に大きな功績をのこし、日蓮教団はもとより近代日本社会にもその影響を及ぼした。日生は、1867年に、介石と同じく、関西地方の藩士の家（現在の兵庫県姫路市）に生まれた。彼の家は代々浄土宗の檀家であったが、厳父が高祖遺文録を研究し日蓮宗の信者となる。日生は幼時から宗門の教育を受け、13歳になった時、僧侶になる。18歳になるまで日生は普通学をおさめつつ、岡山にある寺で過ごした。

1887年9月、19歳の時、日生に転機が訪れる。東京で井上円了（1858-1919）が創設したばかりの哲学館に入学することになったのである。そこで西洋哲学、倫理学、心理学などの新しい学問を学んだ日生は、宗門改革の必要性を痛感するようになる。

宗門改革にとりかかった日生は、まず宗門における迷信打破、いわゆる「雑乱勧請停止」に取り組み、本尊形式の統一を進めていく。つまり、日生は、民俗信仰や権力体制に迎合して生まれた多くの混乱した日蓮仏教の信仰を、本来あるべき釈尊を中心とした信仰に統一し、原点回帰させようとする。地方に土着化した薬師如来や鬼子母神などを本尊とする信仰や、さらに、占いや靈感などを迷信と考え、一切を禁止し、雑乱勧請の廃止を僧侶や一般信徒へ強く求めたのである。

しかし、それは寺院の経済的基盤に打撃を与え、反発を招いた結果、1892年に日生は僧籍剥奪の処分を受けることになる。その3年後の1895年に僧籍を回復した日生は、翌年に「統一団」を結成し、精力的に宗門統合運動を推進していく。その活動が認められ、日露戦争中の1905年、満37歳の日生は顕本法華宗管長に就任し、以後、20余年にわたり管長を務めるのである。

日露戦争後の社会不安の中、しだいに日生は「日蓮主義」による社会へ

の積極的な関わりを主張しはじめ、一般社会への教化活動を推し進めた。とくに1909年に東京で結成した「天晴会」⁽¹⁴⁾は、その活動を支える団体に成長していく。また、1912年に、日生は現在の東京都台東区東上野に帝都布教道場「統一閣」を開堂するが、千余人を収容できたこの建物で毎週行われた日曜講演での日生のわかりやすい語り口は人気を博したとされている⁽¹⁵⁾。

さらに、日生の教化活動は大正・昭和になってからも精力的に行われ、介石と同じく「講演の達人」⁽¹⁶⁾であった日生は、東京だけにとどまらず、全国各地の寺院、公共施設、学校、工場で講演している。一般社会に仏教を、とりわけ「日蓮主義」を弘めようとしていた教化の姿勢は、亡くなるまで貫かれていく。日生は、1931年3月16日に品川の妙国寺にて、癌腫性胃潰瘍のため、65歳で死去する。

日生は、雑乱勸請停止運動にも見られるように、これまで迷信的だとされた日蓮仏教を、より社会的で理性を満足させ、また倫理的にも感化を与えうる宗教として生まれ変わらせようと、即ち近代化させようとする。その流れの中で、彼は日蓮仏教を宗教思想的に再解釈した「日蓮主義」を一般社会に弘めていく。筆者がすでに指摘したように、近代に合った宗教として「日蓮主義」を提唱した日生の思想には、科学的方法論としての宗教学が大きな位置を占めていた⁽¹⁷⁾。つまり、介石が西洋思潮の一つである進化論に影響を受けたと同様に、日生にとっては近代西洋学問の一つである宗教学が重要な役割を果たしたと言えるのである⁽¹⁸⁾。

哲学館の第一期生として日生は、井上円了や清沢満之に師事し、西洋思想・哲学を吸収していき、ハルトマン(1842-1906)の『宗教哲学』やティーレ(1830-1902)の『宗教学原論』等を学ぶ中で、宗教学における思想として宗教進化論を受容した。宗教進化論とは、宗教もまた進化の理法によって、低級の宗教から段々と高等の宗教に進化していくことを説く学説

である。日生は当時の宗教学における常識とされていたこの進化の理法、すなわち、動物崇拜や庶物崇拜から多神主義を経て一神主義へ至る宗教の進化のプロセスを肯定し、独自の宗教類型論を提示し、宗教進化論的に仏教の本尊論を語ることになるのである⁽¹⁹⁾。

介石による仏教批判と日生の反論

さて、本題に戻ると、進化論に加えて、諸宗教の比較から始まった宗教学も進歩し、昔のように宗教、道徳の割拠を許さなくなったと主張する松村介石は、興味深いことに、本多日生と同様に、当時の宗教学において定説として語られた宗教の進化に注目する。それによると、最初、人間が野蠻、無知の時代には、皆拝物宗、多神教で、山の神や海の神などを信じていたとされる。しかし、その後、このような信仰の不合理を自覚し、天地を支配する一神を信じるようになり、その信仰が段々と多くの人々に信ぜられるようになってきたところに宗教の進化があったと見る。ただし、一般の民衆には一神教の神が容易にわからないものであったため、仮の神、仮の仏の祭壇や礼拝所をつくったとされる。

この宗教進化論を受容した介石によれば、その仮神・仮仏はすべて方便であり、真の宗教ではなかった。そこで、彼は読売新聞の連載として「諸教の批判」を発表し、諸教に対して種々の意見を提起する。この連載は諸宗教の指導者を大いに刺激することになる⁽²⁰⁾が、まず彼が批判したのは仏教である。

「先づ佛教者諸君に質す」⁽²¹⁾において、介石は仏教における、いわゆる真諦と俗諦に触れ、玄人向きの真諦では直ちに法身と合することが説かれているのに対し、素人向きの俗諦では、人格的の諸佛、菩薩を通して法身と合するが語られているとして、その諸仏・菩薩の例として、観音、阿弥陀、不動などの信仰を挙げ、それらは方便であり、経典に出て来る仮説の

仏や菩薩である限り、真諦の法身と違ふと批判する。介石の主張は、「今日のやうに知識が普及して其素人にも真諦と俗諦との区別や極意が分かって来ては、此までとは余程其説き方を違へねばなるまい」ということにあり、仏教者に近代に合った形の教理を提示しなければならないと指摘する。そして、介石は、仏教を汎神教の教理であるとし、哲理ではあるが、宗教ではないと主張する⁽²²⁾。そして続けて、宗教的に感化を与えるには、仏教は仮仏や仮菩薩をやめ、真如・法身と合することを説くべきだと断ずるのである⁽²³⁾。さらに、釈迦については、「真面目な男」であるが、「今日に開け来る諸科学即ち人類学、社会学も、宗教学も知らぬ」者で、やはり「佛」ではなく、人として見るべきだと指摘する⁽²⁴⁾。

こうした仏教批判に対し、日生は、友人である介石の思想と活動を積極的に評価しつつも⁽²⁵⁾、「歴史の研究のみが絶対価値だと思ふ科学的思想が間違っている」⁽²⁶⁾と反論する。そして、介石の指摘する時代遅れの迷信の要素が確かに仏教においてもあると認める⁽²⁷⁾が、釈迦の思想については、智慧と信仰を調和するものと考え、仏教を哲学的にも、宗教学的にも調和のある宗教として位置付ける⁽²⁸⁾。

以上からもわかるように、介石は釈迦を歴史的人物として位置づけ、近代西洋において始まった仏教の歴史的研究に根拠を置いている。一方、日生はその歴史的研究の成果を認めつつ、仏教の根本的な教理が歴史研究によって打破されることはないと反論する。つまり、二人の論争の中心になるのは、近代日本の仏教界を揺るがした大乘非仏説論である。

七 大乘非仏説をめぐる論争

大乘非仏説論とは、端的に言えば、大乘経典は釈尊の説いたものではなく、後世に創作されたものだという説である。明治期の日本においては、ヨーロッパにおける文献学的な原始仏教研究が導入されるにつれ、歴史的

事実としての大乗非仏説が確立されていくが、日本の仏教はすべて大乗仏教であり、大乗仏教が仏説でないとするならば、その存立さえも危うくなってくる。

松村介石の仏教批判は、まさにこの大乗非仏説論から始まり、大乗經典である法華經については、「釈迦が説いたものではないが、釈迦滅後五六百年も後に出来たものである」と、法華經の信憑性を問題として挙げる。すでに述べたように、釈迦自身を近代科学が知らない「人」として見ている介石にとっては、釈迦の説く仏教も近代に合わないとは断定する。

興味深いことに、仏教者によって、キリスト教の方が近代に合わない宗教であると、宣伝されることもあった。それは、キリスト教の言う「神」は近代科学では成立しないが、仏教は「神」という存在を立てないのに、仏教こそ近代的な宗教であるという排耶論的な主張であった⁽²⁹⁾。

一方、本多日生は介石の言ういわゆる大乗非仏説論が批判の根拠となっていることを確認しながら反論しようとする。まず、大乗非仏説論が仏教批判として近代以前にもあったことは認めつつも、仏教徒としての信仰の根拠は、釈迦が説いた教え、すなわち經典の内容にあると指摘する。そして、宗教学や哲学に基づいて法華經を論究するならば、その真实性は明らかになり、大乗非仏説論などは問題とならないと日生は主張する。

日生は、信仰の根拠として、「法華經の内容実質」、「哲学的論究」、「宗教学的考証」を挙げ⁽³⁰⁾、哲学的根拠が現象实在論（諸法実相、人格实在）であるとし⁽³¹⁾、宗教学的根拠が汎神思想の基礎と「統一神教」⁽³²⁾の建設の両面を併せ持つ法華經の優位性を示すと力説する⁽³³⁾。その一方で、日生は神に対する固い信仰をもつキリスト者を高く評価し、それがまさに仏教者に足りないところであると嘆き、各宗派に分かれ、「本仏釈尊から遠かる」仏教者の姿を批判している⁽³⁴⁾。

こうした日生の反論に、介石はさらに応答して、昔書かれた經典や聖書

などはやはり近代の知識と学問と合わないところがあるとし、「万物も人間も進化しつつある」ことから、釈迦も完全無欠なものではないとする。そして、「宗教革命時代」には釈迦、耶蘇、孔子などより上に出なければならぬとし⁽³⁵⁾、「佛法と言ひ、法華経と言ひ、それが悪いといふのではない、従来の説き方を変へよと言ふのである」⁽³⁶⁾ とある意味、「穏やかに」論を閉じる。

おわりに

こういった論争において、たびたび出現するのが、「科学的」根拠である。松村介石と本多日生はその「科学的」方法論として進化論や宗教学を挙げ、両者は宗教進化論の理論を相互の反論の根拠とする。つまり、仏教批判を行った側も、その批判に対応した仏教側も近代的な概念や方法論を使い、論争していくことになる。そこに近代日本における宗教論争の性格が垣間見られるのである。

註

- (1) 本稿は、第10回国際日本語教育・日本研究シンポジウム（2014年11月15日、於香港大学港大保良社区書院）での研究発表「近代日本における仏教批判と仏教側の対応—松村介石と本多日生の論争に着目して—」を大幅に加筆・修正したものである。席上、有益な質問やコメントをいただいた参加者に感謝の意を表したい。
- (2) マーク・R・マリズ著、高崎恵訳『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』トランスビュー、2005年、97頁。
- (3) 戦後、松村介石の運動はほとんど消滅し、現在全国に残っている信者はわずか300名であるとされている（同上参照）。また、戦前の会員数に関する資料が少なく、例えば、大正期（1923年）で3000人だったとされている（加藤正夫『宗教改革者・松村介石の思想 東西思想の融合を図る』近代文芸社、1996年、217-218頁を参照）。なお、現在は宗教法人「道会」として、本部（東京都渋谷区）に「松村幼稚園」とともに存在している。
- (4) 「日蓮主義」とは田中智学の造語であり、彼の定義では、「日蓮聖人の唱導なさ

れた『教義』を、(中略) 汎く 信仰も理解も修行も含まれて居て、宗教・宗旨・教法などといふことよりも、今少し広汎 な意味に (中略)、純信仰の立場よりも広い意味に、思想的又は生活意識の上にまで用ひようとして、之を一般化して日蓮主義と呼ぼした」となっている (田中智学『日蓮主義新講座・概論』師子文庫、1934年、13頁)。

- (5) 2001年に法蔵館から出版された大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』の第一次資料を駆使した実証的な研究によって、初めて戦前期の日蓮主義運動の全体像が明らかとなった。
- (6) お互いの思想を批判しながらも、二人の友人関係については、介石も日生も触れている。例えば、日生は、「信仰の根拠」(『統一』416号、1929年、3頁)で、「松村君は、自分の友人であり、非常に懇意にして居る」と書いている。松村介石も、「『統一』誌に出た本多日生氏に答ふ」(『諸教の批判』道会事務所、1929年、93-94頁)では、「本多君」との「個人関係」に触れている。
- (7) イギリスの「ギネスブック」が認定した世界一、1000万を超える発行部数を誇る読売新聞は、1874年11月2日に創刊され、松村介石の連載が掲載された1929年の発行部数が180758部であった(『読売新聞百二十年史』読売新聞社、1994年、666頁を参照)。
- (8) 後に『諸教の批判』にまとめられ、連載に対する反論への介石の答えも加えられ、1929年に道会事務所から出版された。
- (9) 松村介石『信仰五十年』大空社、1996年(初版1926年)、47頁。
- (10) 「信神」は「天地主宰の神」に対する信仰、「修徳」は修行と禁欲的实践、「愛隣」は家族、国家、世界、宇宙のための貢献、そして「永生」は魂と生の不滅を信じること、それぞれ意味するものである。この四つの綱領については、マーク・R・マリンス、前掲書、103-107頁に詳しい。
- (11) こうして「キリスト教臭」がほとんどなかった「道会」は、戦後の指導者たちによって、ふたたびその運動の源泉としてキリスト教が強調されるようになり、1955年に聖書講義や、礼拝における聖書と賛美歌の使用も再開された。しかし、現在でも、父なる神と隣人愛というキリスト教の伝統的教義以外は、自己修養を中心とする新儒学(陽明学)の教えが重視されている(マーク・R・マリンス前掲書、『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』、111頁を参照)。
- (12) この視察について、本多日生は直接介石から聞いている。「婦一協会」の例会で会ったことに触れ、「此間松村介石君が亜米利加の方へ行き又英吉利から佛蘭西へ行って独逸の戦争に就て感じて来たとの事を話された。」と述べている(本多日生『日蓮主義』博聞館、1916年、198-199頁)。ちなみに、洪沢栄一や姉崎正治らによって設立された「婦一協会」の会員には、新渡戸稲造、海老名弾正な

どのクリスチャンや、本多日生、釈宗演、村上专精などの仏教界からの人々も含まれ、明治後期の宗教間の協力の気運が見て取れる。

- (13) 平藤喜久子「松村介石」(井上順孝編『近代日本の宗教家 101』親書館、2007年) 182-183 頁を参照。
- (14) 「天晴会」は、日蓮の人格と主義を研究する団体で、僧侶以外にも各界の人々が集まり、日生は日蓮信奉に根ざした知識人たちの社会的ネットワークを作り上げたのである。日蓮主義者の田中智学や山川智応はもちろん、日蓮宗門の僧侶を始め、高島平三郎、三宅雄二郎、境野黄洋、姉崎正治、小林一郎のような学者から小笠原長生や佐藤鉄太郎のような海軍軍人まで、幅広い分野の人々が集まり、交流した。とくに海軍への日生の影響力は強く、小笠原を通じて、東郷平八郎ともつながりがあったとされる。この会員たちが日蓮主義の考え方を世間に並及するとともに、日生の社会的活動を手助けた。そして、日生は、一般人、女性、学生を対象とした組織も次々と設立して日蓮主義の教えを広め、大正時代の日蓮主義の流行をもたらす(大谷前掲書『近代日本の日蓮主義運動』、169-173 頁を参照)。
- (15) 上野と浅草の間という交通の便利さもあり、日生めあての人々が統一閣を訪れている。その中には、新興仏教青年同盟の妹尾義郎、血盟団事件の井上日召、死のう団の江川桜堂の姿もあった(大谷栄一「本多日生」(井上前掲書『近代日本の宗教家 101』、175 頁)を参照)。
- (16) 同上。
- (17) 本多日生における宗教学の受容と理解の詳細については、拙稿『近代日本における日蓮仏教の宗教思想的再解釈—田中智学と本多日生の「日蓮主義」を中心として—』(大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻 2013 年度博士論文)、79-92 頁を参照されたい。
- (18) 筆者は本多日生における進化論理解についても論じたことがあるが、拙稿「近代日蓮仏教における進化論理解—本多日生と田中智学を手がかりに—」(日本語日本文化教育研究会編『閻谷論集』第 7 号、2013 年、1-29 頁)を参照されたい。
- (19) 本多日生の本尊論に関しては、前掲拙稿『近代日本における日蓮仏教の宗教思想的再解釈—田中智学と本多日生の「日蓮主義」を中心として—』、49-61 頁を参照されたい。
- (20) 例えば、松村介石自身の言葉によると、「読売新聞記者の言に依ると連日連載する此の『諸教の批判』に対して駁撃文の到着して居ることが山の如しとある。実に愉快に堪へぬ。」と、本稿で取り上げる読売新聞紙上の介石による連載に対し、反響が大きかったと述べている(松村前掲書『諸教の批判』、24 頁)。
- (21) 松村介石『諸教の批判』道会事務所、1929 年、3-5 頁。ちなみに、「先づ佛教

者諸君に質す」と題する寄稿が1929年8月28日の読売新聞（宗教欄）に掲載された（大阪府立図書館所蔵データベース「ヨミダス歴史館」を参照）。

- ② 松村前掲書『諸教の批判』、69-71頁を参照。
- ③ 同上、72-73頁を参照。
- ④ 同上、9-10頁。
- ⑤ 例えば、介石の活動について日生は次のように述べる。「道德は陽明学に依り、信仰は基督教に依ったら宜からうと言って、松村君は陽明学と基督教とを協せて道德とし宗教とするといふので「道の会」といふものをやって居る。その思つきは相当に面白い」（本多日生「信仰の根拠」『統一』416号、1929年、27頁）。
- ⑥ 同上、5頁。
- ⑦ 同上、11頁を参照。
- ⑧ 同上、7-8頁を参照。
- ⑨ 例えば、近代科学に基づいた井上円了などによる基督教批判が有名である。円了は、仏教の方が基督教よりも優れた宗教であり、哲学と科学とも両立できるものであると見ていたが、彼の論の組み立て、つまり西洋の科学を基準とした基督教批判がまさに先駆的であった。なお、近代日本における仏教と基督教の関係については、林淳「第二十回大会シンポジウム『近代の仏教と基督教』の趣旨」（日本近代仏教史研究会編『近代仏教』第20号、2013、1-6頁）が参考になる。
- ⑩ 本多前掲「信仰の根拠」、3頁。
- ⑪ 同上、28-32頁を参照。
- ⑫ 「統一神教」とは、本多日生の独自の宗教類型論における宗教進化の最終段階、つまり、動物崇拜、天然崇拜、庶物崇拜、英雄崇拜、交替神教、多神教、単一神教、唯一神教、汎神教、宇宙神教（万有神教）の進化の頂点として成立するものである。それは西洋の思想にはないもので、法華経に説かれている久遠本仏の釈尊が「絶対統一神」であることが基礎となっている。
- ⑬ 本多前掲、「信仰の根拠」、33-35頁。
- ⑭ 同上、27頁。
- ⑮ 松村介石「『統一』誌に出た本多日生氏に答ふ」（松村前掲書『諸教の批判』）96頁。
- ⑯ 同上、99頁。